

Research on the process by which parents of children with schizophrenia associate with their experience : From onset to continuing life in community

| | |
|------------------------------|---|
| 著者 | 川口 めぐみ |
| 著者別表示 | Kawaguchi Megumi |
| journal or publication title | 博士論文要旨Abstract |
| 学位授与番号 | 13301甲第4694号 |
| 学位名 | 博士（保健学） |
| 学位授与年月日 | 2018-03-22 |
| URL | http://hdl.handle.net/2297/00051281 |

doi: <https://doi.org/10.24517/00050123>



平成 30年 2月 20日

博士論文審査結果報告書

報告番号

学籍番号 1529022004

氏名 川口 めぐみ

論文審査員

主査(職名) 塚崎 恵子(教授)



副査(職名) 大桑 麻由美(教授)



副査(職名) 北岡 和代(教授)



論文題名 Research on the process by which parents of children with schizophrenia associate with their experience: From onset to continuing life in community

論文審査結果

【論文内容の要旨】

子が統合失調症の発症から地域での生活を継続していくまでに、その親はそれらの経験とどう付き合っていたか、そのプロセスを明らかにした。統合失調症の子をもつ親 14 名を対象として、半構造化面接を実施した。木下の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析した結果、2つのカテゴリー、13の概念を抽出した。子の発症当時の親は、子の症状を「幻覚・妄想と捉えず生活を継続」していた。子が診断を受けることで親は精神疾患への衝撃を受け、【親としての自立への期待】のプロセスに入っていた。この衝撃には、親自身の偏見が影響していた。子の「完治を信じる」親は、子の回復が見られると「同世代と足並みを揃えるために手を尽くす」ことを行い、また子が再発を経験すると「叱咤激励する」ことを行っていた。この回復と再発を幾度も経験することで親は「幻覚・妄想への対応に迷走」していた。しかし、「家族会から安心を得る」ことをコアの概念として、「子を尊重する」ことや「自分の人生を楽しむ」ことができるようになり、【回復の限界の認識】のプロセスに入っていた。親は、「統合失調症の子を受容する」ことで「子のできる範囲の生活を受け入れる」ことができ、子の地域での生活継続に至っていた。「統合失調症の子を受容する」と「子のできる範囲の生活を受け入れる」ことには、「完治を諦める」ことが影響していた。その一方で、年齢を重ねるにつれ、子の「親亡き将来の準備をする」ことに力を注ぐようになり、子の「自立への捨てきれない望みを抱く」思いが沸き上がり、「子のできる範囲の生活を受け入れる」という現実とその望みとの間で、心の葛藤を生んでいた。

【審査結果の要旨】

統合失調症者の地域での生活移行が進む中、症状の再発を予防しながら地域生活を継続するためには、生活を共にする親への看護支援が重要となる。本研究において親の経験や心情が明らかにされ、効果的な看護支援を提言することができ、学術的に意義ありと評価できる。また、本研究による新たな知見は、今後その活用が期待できる。公開審査では、いずれの質問にも適切な対応がなされた。以上、学位請求者は本論文審査及び最終試験の状況に基づき、博士(保健学)の学位を授与するに値すると評価する。